公益財団法人ハイライフ研究所
日本アジア共同研究プロジェクト
取材レポート「アジアの都市ライフスタイル新潮流」

「ホーチミンの都市ライフスタイル新潮流」（連載４回）

第１回　ホーチミン市民の人生観や生活習慣

主執筆者　DO My Hien（ドミーヒエン）

2002 年　ハノイ貿易大学貿易学部日本語学科専攻卒業
同年　　キャノンベトナム人事部入社
2006 年　信州大学大学院、経済・社会政策科学研究科経済修士卒業
2007 年～現在　名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期
2011 年～2013 年 2 月　貿易大学ホーチミンン市分校講師（経済学史）

研究分野：農村開発、開発経済、経済学史

主執筆者　NGUYEN THI BICH THUY（グェン　チイ　ビク トゥイ）

1999 年　ホーチミン人文社会科学大学　東洋学　入学
2001 年　神戸大学　国際文化学部　入学在籍
2003 年　ホーチミン人文社会科学大学　卒業
2009 年　ホーチミン人文社会科学大学　日本語教師
2011 年　Southern　Columbia アメリカ大学修士経営 Marketing 卒業
2011 年　貿易大学ホーチミン市分校 日本語講師
2012 年　Phillipine Bulacan 大学　博士コース　　経営
2013 年　Saigon Arts 短期大学　校長助手

研究分野　日越比較文化
事業分野　2009 年　Lapis 日本語学校　起業
　　2010 年　Aqua Palace　Wedding & Event Hall　起業

共同研究者　古川一郎　一橋大学教授
　　福田　博　縄文コミュニケーション（株）

１．ベトナムの歴史概略とホーチミン市（旧市名サイゴン）の発展

１）ベトナムの歴史概略
２）’08 年金融危機以後、インフレに悩まされるベトナムの経済動向
３）ホーチミン市の発展

２．ベトナム人の価値観と北部・中部・南部の気質

１）儒教に影響されるベトナム人の伝統的価値観

２）ベトナム人の気質

３）北部・中部・南部の気質の違い

３．活気溢れるホーチミンのライフスタイル

１）国内外の料理が集う“サイゴン食文化”

２）伝統的ファッションと現代的ファッションが共存

３）植民地時代からの住宅と新しい住宅トレンド

４．社会に於ける女性の役割と立場

１）男尊女卑の古い考え方と男児願望

２）人口抑制策によるいびつな人口動態

３）国家と社会に貢献する女性

★日本側共同研究者の視点レポート

はじめに

ベトナムは、インドシナ半島の東端に位置し、南北に細長く北部、中部、南部と地理的特性も異なり、また各地域の伝統文化や生活習慣も変化に富んでいる。国家の正式名称はベトナム社会主義共和国。共産党一党支配の下、社会主義政策を遂行している。人口は 8,784 万人（2011 年）、キン族（９割）と 53 の少数民族の多民族国家である。宗教は大乗仏教が 8 割。名目 GDP は 1,236 億ドル（2011 年）、面積は、約 33 万ｋ㎡'と九州を除く日本の面積とほぼ同じで、とても親日的である。

1986 年のドイモイ以降、ベトナムは急速に経済発展を遂げてきたが、リーマンショック（2008 年）以降、経常収支が悪化し、通貨ドン安、高インフレに悩まされ、現在はインフレ抑制策が採られ、その影響で不況に陥っている。

しかし、法律の未整備や賄賂の問題があるものの、将来の消費市場として有望であり、外資系企業の進出が後を絶たない。またさらに越僑といわれる海外ベトナム人（約 200 万人）は、国内の親族に約 90 億ドルもの巨額のマネーを送金し経済の大きな下支えになっている。

現在、格差はあるものの都市生活者は、確実に豊かになっている。一部の富裕層や中間層予備軍が増大し（中間層は未成熟）、大きな消費市場を作り出している。特にホーチミン市民は、向上心が高く、将来に楽観的であり、格差が拡大しているものの、階級社会ではなく、基本的な生活はできる。そしてなにより家族を大切にし、コミュニティや友人との絆が深く、人生を楽しもうという意欲に溢れている。

＊夕方のバイクと自動車の大渋滞

今回の特集「ホーチミンの都市ライフスタイル新潮流」は、日越国交 40 周年を迎えるベトナムで、商業経済都市として発展するホーチミン市の富裕層、中間層予備軍の新しい生活文化や刺激に満ちたライフスタイルのトレンドについて報告する。

第一回は、ベトナム人の気質、経済発展によるライフスタイルの変化、そして家族形態の変化と社会に於ける女性の役割について。第二回は、ドイモイ以降の経済成長と今後の経済見通し、そして豊かになる消費文化と格差問題について。第三回は、拡大する都市化の影響と流通業態の変化、そしてアーバンライフスタイルについて。第四回は、富裕層、中間層の今後の動向、そして日本との交流について。以上の内容について、関係者への取材、文献や各種データに基づいて報告する。

１．ベトナムの歴史概略とホーチミン市（旧市名サイゴン）の発展

１）ベトナムの歴史概略

ベトナムの歴史は古く北部では、BC400 年頃には、ドンソン文化（青銅器文化）が栄えていた。しかし、北部は中国と接しているために常に中国からの影響を受けてきた。BC111 年、漢の武帝の遠征により南越が滅亡し、その後 1000 年の長きに渡り中国の支配下に入り、生活様式や儒教など中国文化の大きな影響を受けた。そして 11 世紀になると統一王朝が成立し独立したが、中国の影響力は残った。

1852 年にはフランスがサイゴン（現ホーチミン市）を占領し、植民地としての支配を受ける。そして第二次大戦終了後、独立を求めて抗仏戦争が始まり、ジュネーブ協定（1954 年）により北ベトナムと南ベトナムに分かれ独立した。サイゴンは南ベトナムの首都として発展。その後 1960 年に米国とベトナム戦争が勃発したが、1975 年サイゴンが陥落し、米国との戦いに勝利した。そして 76 年に南北ベトナムが統一されベトナム社会主義共和国が成立。サイゴンは建国の父、故ホーチミンの名を都市の名称としホーチミン市とした。建国当初は、土地の国家所有、農業の集団化、都市住民の農村部への移住促進などの社会主義政策が推し進められ、伝統的な価値観や家族観との軋轢も生まれた。

その間、自国の西南を脅かすポン・ポット軍（Pol Pot、ポル・ポト）を制圧するためカ

ンボジアに侵攻（1977 年)。そして中国がポン・ポット政権を支援し、カンボジアをその影響下に置きベトナムに圧力をかけようとしていたため中越戦争が勃発。そして多くの犠牲者が出た。[1]

この様に、ベトナムでは、解放のための戦いが繰り返えされ、戦時経済は国民の生活を混乱させた。そして周辺国や先進各国との関係が冷え切り、ASEAN 各国と比較しても国民経済が疲弊し、経済的な再生が喫緊の課題となった。その様な状況を踏まえて、1986 年社会主義下での市場経済化政策「ドイモイ（刷新)」に転換した。その結果、カンボジア和平パリ協定が成立し（1991 年)、中国との国交が正常化（1991 年）し、また米国の対越経済制裁解除（1994 年）がなされた。そして 1995 年、ASEAN 加盟、APEC 加盟（1998 年)、日越投資協定（2003 年)、さらに WTO 参加（2007 年）により、現在の経済的な発展の基盤が整備されてきたのである。

＊博物館にはベトナム戦争時代の様々な兵器が展示されている

２）’08 年の金融危機以降インフレに悩まされるベトナム経済

ドイモイ以降、国際経済や ASEAN 経済圏に組み込まれる前のベトナム経済は、1998 年のアジアショックにもさほど影響されず順調に発展してきた。将来の消費市場として、またチャイナプラスワンとしてシンガポール、日本、韓国、台湾、欧米企業などの外資系企業、そして中国企業が進出し、資本の投下、生産工場の整備、そして雇用を生み出している。またインフラ整備等の政府開発援助（ODA）も行なわれ、ベトナム経済の発展に大きく貢献してきた。その結果、実質 GDP 成長率は 7～8%と高い経済成長を維持してきた。そして 2000 年以降は、WTO に加盟し、国際経済の枠組みの中で平和を目指し、自国経済を発展させる政策を大きく進めたのである。

しかし裾野産業が未成熟なベトナム経済は、グローバル経済の影響を大きく受けることになり、’08 年リーマンショックに端を発した国際金融危機は、経済基盤が脆弱なベトナム

[1] 筆者（Hien）の母の弟は、22 才の若さでポン・ポット軍との戦いで戦死。また母の姉の夫は中国との国境紛争で戦死し、母と妻と 5 人の子供が残された。この二つの戦いは、その正義、不正義の認識如何に関わらず、深い悲しみや怒りが、未だに家族の心の奥底に残っている。

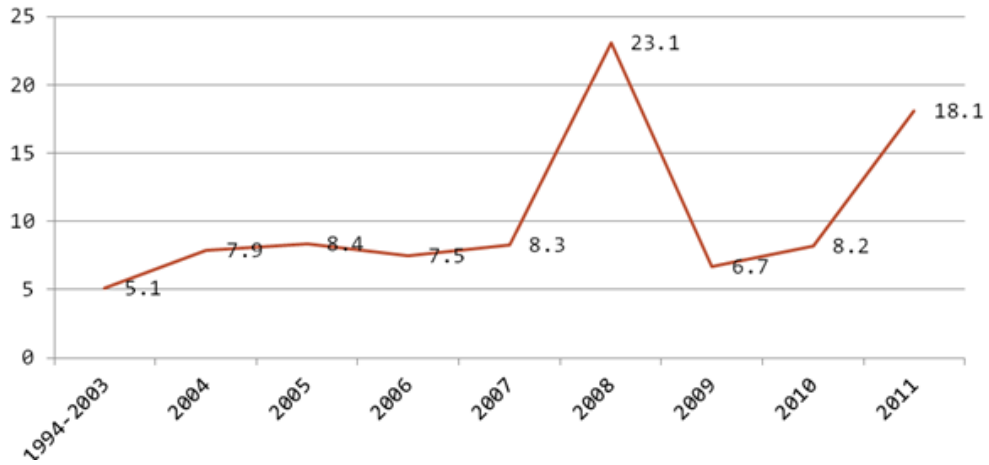
経済を直撃した。20%を超えるインフレと世界同時不況により、ベトナム経済は失速。経済の立て直しを図るために政府は景気対策に取り組み始めたが、その結果、10 年、11 年と再度高インフレが発生し経済が大混乱に陥った。そこで 11 年初めインフレ抑制策に転じ、引き締めを強化した。その結果、12 年上半期の GDP 伸び率は 4.4%増程の低成長になったが、インフレ率は 5.0%程度に沈静化した。

他方、国内経済成長のもうひとつの視点として不動産開発がある。国内の投資家や事業家は、他のアジア諸国と同様に、拡大する都市化の動きに対応して、土地に価値を見出し、高層住宅やオフィスビルなどの不動産開発を積極的に行い、都市の整備や経済の発展に大きく貢献した。そして巨万の富を得る事業家も出たのである。しかし 2005 年をピークに不動産バブルがはじけ、現在の不動産価格は半額程度に暴落し、多くの開発案件も建設途中で中止になるなど不動産市場は停滞している。その結果、不良債権が増大し銀行経営が悪化して銀行の合併も相次ぎ、実体経済に大きな影響を与えている。2011 年から 2012 年にかけての中小企業倒産件数は 10 万件を超えた（GSO、ベトナム統計局）。現在、インフレ抑制策の影響で、貸出金利は 10 数%になり、企業への融資が滞り、企業活動の停滞と消費不況に陥っている。

この様なインフレ状況の中では、人件費も高騰している。2011 年はインフレに対応するために年間２回も賃上げが行なわれた。現在、労働・傷病兵・社会問題省（MOLISA）は労働者の最低賃金引き上げを検討しており、2015 年までに月額約 150 ドル程度に引き上げられると思われる。現在、ホーチミン市のホワイトカラーで平均月給約 200 ドル、日系企業で約 300～500 ドル、管理職で約 800 ドルである。都市部では、高インフレであるものの確実に所得が増え、可処分所得も増大している。

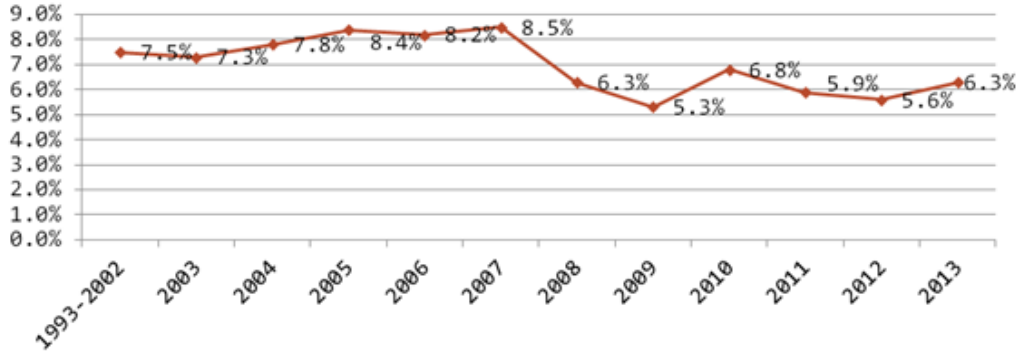
またホーチミン市では一人当たり GDP が 3600 ドルに(2012 年)、また年間平均所得も 2500 ドルに達したと思われる。一人当たり GDP が 5000 ドルを超えると、自動車が売れ始めるなど消費が急激に拡大すると言われており、爆発的な消費市場の拡大が見えてきている。

グラフ１．インフレ率（単位%）



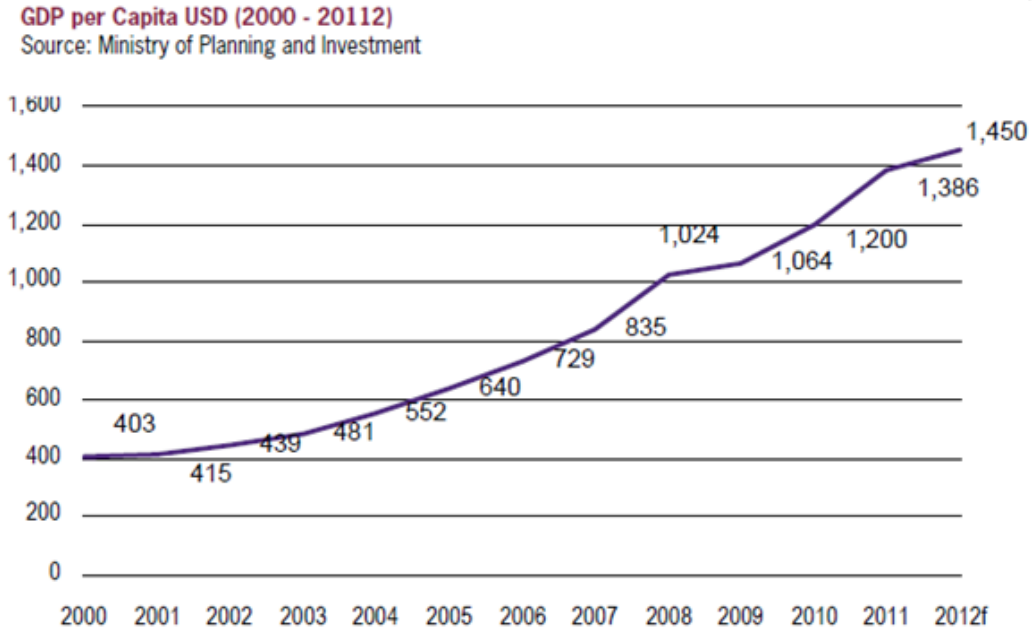
出所：ベトナム投資計画省（MPI）

グラフ２．ベトナム実質経済成長率



出所：IMF（2012 年と 2013 年は予測）

グラフ３．ドル換算名目 GDP 推移



出所：ベトナム投資計画省（MPI）

表１．ベトナム経済の推移

対象年月	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
実質 GDP 成長率(%)	7.1	7.3	7.8	8.4	8.2	8.5	6.2	5.3	6.8	5.9
名目 GDP 総額 （単位：100 万＄）	35,064	39,552	45,428	52,917	60,913	71,016	91,094	97,180	106,427	123,600
一人あたりの GDP（名目） ＄	440	489	554	637	724	835	1,048	1,068	1,174	1,374
消費者物価上昇率（%）	3.9	3.1	7.7	8.3	7.5	8.3	23.0	6.9	9.2	18.6

出所：JETRO

３）ホーチミン市の発展

南部地域は、メコン川の肥沃なデルタ地帯で、年３回も農作物が取れる豊かな土地である。その歴史は、比較的新しく 300 年程の歴史である。当初、満州人や Chanlap（カンボジア）、Ailao（ラオス）人などのクメール人が居住。そこにベトナム人が南下し Nguyen 王朝が成立し統治のために城壁を築き、軍事都市として発展させた。南部の文化はクメール人や華人、そしてベトナム人など各民族との長い間の交流で生まれたものであると言える。

その後、フランスはベトナムを植民地とした。フランスは、ベトナムを統治するためその民族的特性を見極め、北部、中部、南部を分けて分断統治するという巧妙な植民地体制を敷いた。そして植民地政策として貿易を重視する港湾都市を計画し、約 50 万人の都市が開発された。それが「東洋のパール」と言われた旧サイゴンの街並みの原型である。

現在、ホーチミン市は人口約 700 万人、それに加え、住民未登録者約 100 万人が居住すると推定される（2009 年）。ハノイは約 640 万人、ダナンは約 90 万人であり、ホーチミン市は、ベトナム第一の商業経済都市として成長し続けている。サイゴン時代から、市場経済の経験が長かったホーチミン市は、ベトナム経済発展の牽引車としてその役割を担い、ドイモイ以降の経済発展に貢献してきている。

街並みは植民地時代のフランス風の美しい建築物が多いが、拡大する経済発展や流入する人口増に対応するため再開発が進み、近代的な商業ビル、オフィスビル、ショッピングセンターなどの建設が進んでいる。今後は新たな住民の流入と外資系企業の進出などにより、また激しい交通渋滞に対応するための新たな住宅、交通、上下水道などの公共インフラなどの都市基盤の整備が喫緊の課題となっている。

＊欧風建築と近代建築が調和

＊高級ブランドショップが人気

２．ベトナム人の価値観と北部・中部・南部の気質

１）儒教に影響されるベトナム人の伝統的価値観

ベトナムは、1000 年の長きに渡り中国に支配され、その結果、中国文化の影響を強く受けてきた。また 19 世紀中頃からは、約 100 年に渡りフランスの植民地となり、生活文化などに影響を受けたが、儒教などの中国文化は深くベトナム社会に根付いている。

またベトナムは、独立のため戦火に明け暮れてきた歴史を持ち、自分達の生命や財産は自分達で守るという意識を持つ。従って、「王のオキテもムラの垣根まで」という諺に表される様に社会の最小単位である「家族」と「村」の存続と発展を重要視する。ベトナムは、血縁や地縁の結びつきを大切にし、基本的に個人主義的な民族といえる。それは入学から就職、出世、そして仕事まで縁故が幅をきかす社会であり、お礼としての贈答文化が社会の隅々まで定着していることからも理解できる。

現在でも、封建時代ほどではないが、儒教の影響を色濃く受けている。大家族制、村の共同体、父母を大切にすること、姉妹、親戚は困難な時に助け合うこと、学生は先生を尊敬し、年下の人は年上を尊敬する。そして仁・義・礼・知・信を生活文化の根幹に据えているのである。

しかし、この道徳観がホーチミン市では、変わり始めている。親が近くにいない核家族の共働き夫婦は、子育てや家事はヘルパーに頼る。また、サイゴン時代から居住する家族も核家族化が進み、親の面倒もヘルパーに頼るようになってきている。新しい傾向として、金銭で家庭内の問題を解決するという考えが増えてきている様に思われる。また、地縁や血縁を重視するベトナム社会で、地域の人々と一緒に行なう祭事や行事が、ホーチミン市内では少なくなり、隣近所の人の顔さえ分からないということがもはや常態化している。

ベトナムのもうひとつの特徴として言えるのは階級社会ではないということである。地域や民族などでの差別的な行為や結婚する際の階級差はあまりない。社会主義政策の影響もあるが、地域社会の中で人々は割合平等に暮らしている。しかし急速な経済発展は、平等な社会に大きな経済的格差をもたらした。特に、大都市ではその傾向が顕著であり、格差は社会的不安要素として対応せざるを得ない課題にもなっている。

２）ベトナム人の気質

ベトナムの代表的な教育・歴史・文学・宗教学者で元ベトナム帝国の首相でもある Tran Trong Kim [2](1883-1953)が書いた「ベトナム史略」(1919) によると、ベトナム人の良い気質としては、頭が良く、記憶力が高く、勉強好きで物事を素早く理解でき、器用な面を持つ。そして女性は働き者であり、家族を大切にし、儒教の教えから女性としての高潔（純真)、 礼儀、勤勉、節約を守っていることである。

ところが、狡猾なところもあり、人を見下したり、考えが浅く、強引であり、 忍耐力がなく、面子がなにより重要で見栄っ張りであるという。また、占い好きで[3]、来世を信じているが、反面、どのような宗教にも熱心ではないなどの好ましくない点もあると指摘する。

また、米国のアメリカ社会研究所のベトナム人研究者は、ベトナム人の代表的な性格を

---

[2] 20 世紀の最も有名な歴史家（Harvey H. Smith & others, North Vietnam ~ a country study~, The American University, 1981, p.157）

[3] ベトナム人は中国の文化から影響が強いため、占い、来世に関することを信じ過ぎる民族である、大切な事業をする前に必ず占いに行く。仕事（ビジネス、政治）の大切な決断が出来ない時にも占いに頼る。

下記のように評しており、ベトナム人から見ても的を射ていると思われる。

１．スマートで創造力を持って、短期間の困難には立ち向かうが、長期間の計画性や対応能力が低い。
２．知識取得には熱心であり、理解力は高いが、勉強は中途半端（早く諦める）。知識は体系的なものにならない。
３．節約しているが、一方では無駄使いする。困難な状況では団結力が発揮され助け合うが、平時の状態では求心力に欠ける。
４．集団になることは好きだが、目的を達成するための組織力強化や協調性は弱い。
（仕事は一人では成功、二人ですれば不十分に、三人ですれば仕事が散乱してしまう）

（出所：Phan Thanh Nham、“ベトナム人の性格の両面性”、
ホーチミン社会・人文大学修士論文）

ベトナム人の気質は、1945 年からの社会主義国家としてのイデオロギー教育により、伝統的な道徳観は否定され、社会主義の集団性と平等性が新たな規範となり、徐々に変わってきている。そしてドイモイ以降の市場経済化の影響で、家族や共同体より個人を重んじる風潮や金銭で判断する価値が受け入れられ、さらに伝統的価値観は希薄になってきた。しかしその反動として、ベトナム人としての伝統的なアイデンティティを見直す動きが、海外留学組から出始めているのも新しい動きである。

３）北部・中部・南部の気質の違い

ベトナムはその地理的特性から、北部、中部、南部の三つの地域に分けられ、各地域の伝統文化や生活習慣、共同体、仕事に対する考え方などが違う。

北部は、四季があり、冬は日本ほど雪は降らないが、寒さは体の芯までこごえる程である。また北部は中国と接していることで長い間支配された苦難の歴史を持ち、また文化的にも大きな影響を受けた。この様な厳しい環境の中、この地域の人々は、勤勉であり、勉強家であり、研究者や多くの官僚や政治家など様々な分野で人材を輩出してきた。

中部は、後背地が険しい山脈で農地も狭く、夏はラオスからの風で厳しい暑さ、冬は山岳地域の西から冷たい風で耐えがたい寒さである。その上、台風の被害は、殆ど中部地域を直撃し、農業生産等に甚大な被害をもたらす。その様な厳しい自然環境の中で人々は生きているのである。そのため中部の人々は一生懸命働き、努力し、節約し、忍耐力が強い。中には南部に移住したり、海外に出稼ぎに出たりしている人も多い。

南部は、一年中暖かく、メコンデルタの恵みを受け、果物や農作物、魚介類なども豊富であり、食べることには困らない。仕事はゆったりと行い、生活は今日のことだけで明日のことを心配する必要はない、という性格なので楽観的で、優しい態度で人と接することが多い。

この様に、各地域により気質や生活習慣が異なるため、ビジネスや研究などの分野では、その気質の違いを上手に利用することにより、良い成果を生み出すことが可能となる。例えば、難しい課題は北部出身者に任せ、商売・ビジネスのことだったら南部の人に任せ、手間がかかる仕事や新規プロジェクトなどは、頑張り屋の中部出身者に任せるなどである。

３．活気溢れるホーチミンのライフスタイル

１）国内外の料理が集う“サイゴン食文化”

ホーチミン市、即ちサイゴンは南部地域の中心であり、東西南北の食文化のジャンクションである。ベトナムでは、大家族が基本で、市民も会社の終業時間になると残業は殆どせずに、バイクで帰宅し家族全員で食事をする。親子三代同居であれば、食事を作るのは祖母の役割である。野菜や鶏肉、豚肉そして果物などの食材は新鮮で豊富で安い。伝統的料理は、バラエティに富んでいる。ベトナム料理の特徴は、うま味調味料で味を引き立て、味付けは自分の好みで行なうためニュクマム（魚醤）や唐辛子などが用意されている。

サイゴンの人々の食習慣は、朝食は殆ど屋台の外食。平日の夕食は、必ず自宅で家族一緒に食事をする。夜に友人と約束がある場合でも、家族と夕食を取ってから出かけるなど家族と共有する時間を大切にする。そして祝日や週末の夜には、家族や友人達と様々な店や屋台で食べたり飲んだりする。翌朝まで開いている店が Cho Lon 市場や Ben Thanh 市場にはたくさんある。サイゴンの食生活は 24 時間休みなしである。

サイゴン料理は、魅力的な田舎の料理でとても美味しく砂糖、ココナッツミルクなどの甘さがあり、ユニークな南部独自の味である。そしてサイゴンには、国内外の様々な地域から美味しい料理が集まってきている。お馴染みの Pho（ヌードル）、Cha Ca（フライ魚）、Bun（ビーフン）、Mien（春雨）、Nem HaNoi（ハノイ揚げ春巻き）、Banh Cuon　Tay Ho（蒸し春巻き）　など首都ハノイや北部の料理もサイゴンの食文化の一部となっている。また中部の料理は、王朝料理もあり Bun Bo Hue（牛肉ビーフン）、 Nem（揚げ春巻き）などがある。

また、サイゴンは、中国、インド、フランス、アメリカ、イタリア、ロシア、日本、オーストラリアなど、様々な国の食文化が根付いている街でもある。

サイゴンは、国内外の多くの食文化を取り入れているが、伝統的な料理が失われることなく、むしろ多様な食文化として深みを増している。またサイゴンの食文化として忘れてならないのは屋台や露店である。主食や軽食、おやつ、飲み物などバラエティに富んで美味しいそれらの料理は、市民の日常生活に溶け込みサイゴンのシティライフを豊かにしている。

＊露天でフルーツを売る

＊調味料で自分の好みの味に調整する

その様なサイゴンの街に、1997 年、外資系のファーストフード、 KFC がオープンした。その後ロッテリア、Jollibe、バーガーキングなどのファーストフードが新たにサイゴンの食文化に加わった。

サイゴンでは、コーヒー文化も根付いている。ベトナムコーヒーやCà phê đá（アイスコーヒー）を飲みながら友人と話をすることが好きなのである。多くのガーデンカフェは、広く、緑も豊かであるため市民の憩いの場として人気がある。そこへ新しいスタイルのカフェが登場した。ベトナム系のTrung Nguyen コーヒー、High Land コーヒー、オーストラリア系のGloria Jean, 韓国系の The coffee Bean,アメリカ系の NYDC などで、サイゴンで大成功を収めている。そして2013年2月1日スターバックスの第一号店もできた。一杯約３ドルと高いにもかかわらず大繁盛である。

＊木陰の中のレストラン

＊香りが立つベトナムコーヒー

２）伝統的ファッションと現代的ファッションが共存

現在のベトナムファッションというと伝統的なものと現代的なものに分けられる。伝統的なファッションはアオザイで、学校の先生や会社の制服、結婚、お祭りなどで着られている。最近は、若者向けにデザインを変えているものもある。また気安さを重視したÁo Ba Ba などは、年配者に人気である。そして現代的なファッションは、香港や韓国の映画やTVドラマの影響を受け様々なスタイルが溢れている。そしてWTO加盟後は、有名なファッションブランドがホーチミン市に進出。この動きが若者のファッションに対する意識を高めた。

しかし、ホーチミン市の殆どの人々は、まだファッションに対する意識が低い。彼らはセンスの良いファッション雑誌の色柄やスタイル、そしてコーディネートを参考にするのではなく、自分の狭い好みでファッションを選択している。残念ながら、ホーチミン市の人々は、まだファッションセンスが洗練されているとは言えない。ホーチミン市は一年中

暑いので、ファッションのバリエーションはそれ程多くはないということも、その理由なのかも知れない。

３）植民地時代からの住宅と新しい住宅トレンド

市民の住宅は、一般的に集合住宅か一戸建。市街地の一戸建は間口が４～５㍍で奥行きが 10～20 ㍍程度のとても細長い住宅で３～４階建てである。中には、間口４㍍、奥行き 50 ㍍という殆ど道路のような物件もある。これはフランス統治時代に間口の広さで税をかけたことが由来と言われている。商売を営む家では、建物の１階は店として使用し、２～４階が居住空間となる。商売をしていない家は、道路に面した１階が食事やリビングの場となり、また大事なバイク置き場にもなる。比較的豊かな層は各フロアを家族がそれぞれ利用するが、庶民層は各フロア毎に一家族が暮らす。相続などが繰り返されると、建物や土地の所有権・使用権が曖昧になり、再開発の地上げ時に困難を極めるのはこのためである。

市街地の住宅価格は、裏通りの一戸建ての 60 平米で、約 15 億～20 億ドン（70,000 から 100,000 ドル）。表通りの家の価格は、その立地によって変わり、約 8000 万～1.8 億ドン/平米程度である。60 平米のマンションも 50,000 ドル程度であり、マンションの値段が一戸建ての値段とほとんど変わらないため、多くの人が一戸建てを選択する。

ベトナムは、独身の場合はもちろんであるが結婚後も家族同居が基本的なスタイルである。また地方から出てきた縁戚も同居することが普通。市内に縁戚を持たない学生やワーカーは、友人などとアパートの一室を数人でシェアして借りている。ベトナムの家は、風通しを良くし、亜熱帯の夜をできるだけ快適に過すように工夫されている。これが伝統的な住居スタイルである。

しかしここ十数年来、市内への人口流入が多く、今後も増大が予想されるため、現人口 700 万人を超えるホーチミン市では新たな住宅供給が大きな課題となっている。

市内の再開発は地上げ等で時間がかかるため、地方政府はサイゴン川の対岸でこれまで湿地帯だった土地を、新しい住宅や商業施設の開発用地とした。2000 年くらいから市街地北東の２区は巨大なアパート群が開発され、豪華なビラも立ち並び、欧米人やベトナム富裕層が居住する。また市街地南の 7 区フーミーフン地区は当初地方政府と台湾資本が開発し、後に韓国資本も開発に加わり、高層住宅や一戸建の豪邸が建ち並んでいる。これは実需も多いが投資目的も多い。

2005 年以降、不動産市況は悪化し政府は様々な対策を講じているが、高層住宅価格の回復の兆しは見えていないのが現状である。但し、一戸建ては、価格が下がらず、むしろ上昇している物件もある。

一般的に、ベトナム人は一戸建を好むが、若者や中流階級の人々はマンションを好む傾向がある。生活環境が洗練され静かで安全であるため、「一戸建てよりも快適」と考えているのである。

＊洗練されたインテリアの居住空間

＊近代的な高層集合住宅

４．社会に於ける女性の役割と立場

１）男尊女卑の古い考え方と男児願望

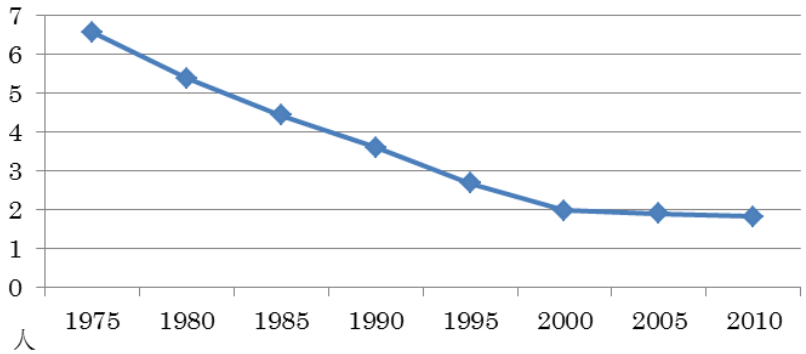
政府は、将来の人口増に備え、過去 50 年間に渡り、一世帯当たり子供は一人から二人までとする小規模家族奨励人口抑制策を行なってきた。公務員などは、３人子供を産むと出世に影響するなどの社会的制裁もあり、３番目の子供の出産世帯は 2009 年には 16.1%に減少している（ベトナム統計総局）。二人っ子政策は成果を上げているといえる。

しかし、様々な理由で３番目の子供が生まれるケースは、後を絶たない。第一の理由は、家父長制や男尊女卑の下、家の跡継ぎとして男の子供が欲しいという古い考え方である。儒教の教えでは、女性は父親や主人、子供に従わなければならない。子供の名字も父親と同じにし、家族の財産も父親が所有する。従って、子供が二人いても女性だけの場合、どうしても男の子がほしいと考える家族は多い。10 年程前までは人口抑制策は厳しかったが、最近では罰則も軽くなり、男の子を産むために３人目を産む家族も多くなっている。但し、これらは、幹部や公務員の家族に限られているのが現状である。

第二の理由は、家族には男女両性の子供がいた方が良いとする考え方である。この理由により、三人目の子供を出産するケースが多い。但し、女の子を出産する場合は、男の子を出産するときよりはプレッシャーは少ない。

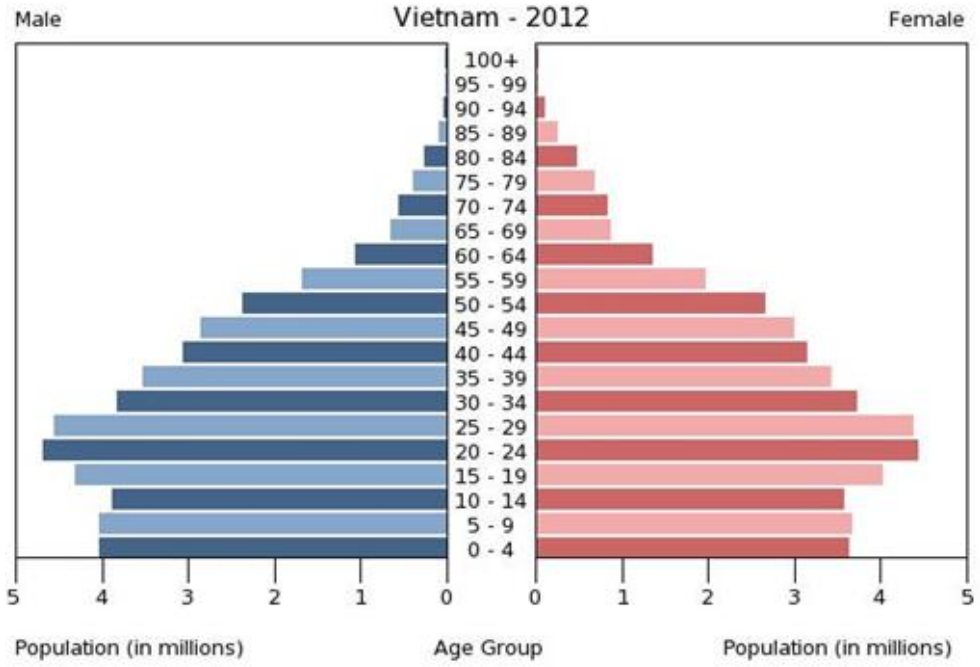
第三の理由は、農家の場合は、男は労働力であり、また農民の殆どは年金も健康保険もないため、両親の老後の面倒を見ることが必要だからである。同様に公務員は保険があっても、とても少ない金額なので定年後の生活のため男の子が必要となる。

グラフ４．ベトナム合計特殊出生率　出生率　1.80 人（2011 年）



出所：世界銀行

グラフ５．人口動態



出所：Http://www.cia.gov/libray/publications/the-world-factbook/geos/vm.html

表２．ベトナム人口構成

全人口	92,477,857 人（2013 年 7 月、推測値）
・0－14 才	24.6%　男 11,931,623 人　女 10,807,661 人
・15－24 才	18.4%　男 8,796,395 人　　女 8,215,536 人
・25－54 才	44.5%　男 20,554,252 人　女 20,551,460 人
平均年齢	28.2 才（男 27.1 才　女 29.2 才）
宗教	仏教徒 9.3%、カソリック 6.7%、ホアハオ 1.5%、カオダイ 1.1%他
民族性	Kinh85.7%、Tay1.9%,Thai1.8%,Muong1.5%,Khmer1.5%,Mon1.2%、 Nung1.1%,Others5.34%　（1999　Census）

２）人口抑制策：いびつな人口動態

子供の出産に絡むもうひとつの問題は、出生時男女比率が 112/100 とバランスが取れていないことである。北部では男女の比率はもっと大きく、男女比が 130.7/100 という地域もある（Hung Yen 省調べ）。その理由として国連人口基金は、女の子が妊娠したと分かれば中絶する傾向があると報告している。

人口と家族計画局によると、「このままでは 2030 年までに赤ちゃんの男女比率は 125/100 になる。そしてベトナムは 400 万人の嫁が足りなくなる。」と警鐘を鳴らしている。

さらに Camilla Mellander 氏（在ベトナムのスウェーデン大使）は、「家父長制や男尊女卑

の古い認識を改善しなければ、結婚率が下がり、人身売買や家庭内暴力が必ず増える」と問題提起をしている。特にベトナムは台湾（ベトナム人花嫁の累積は約 10 万人）や韓国、そして中国に農村花嫁を送る国であるため、女性の数が不足することは、健全な社会の発展のためには大きな問題となっている。

３）国家や社会に貢献する女性

女性は社会に対して重要な役割を果たしている。まず、女性は家族の中で子供達の良き母親であり、教育者であり、夫の仕事をサポートし、また年老いた両親の面倒を見るなど家族全員の幸福を支えている。

女性は、妻や母親という天職だけではなく、社会の中でも大きな役割を持っている。女性は、ベトナムの独立と建国の歴史の中で、大きく貢献してきた。歴史を見ても、Hai Ba Trung[4], Ba Trieu[5]など女性の英雄も多く存在している。近年では独立戦争に多くの女性が参戦し、自由と民族解放のために戦いベトナムは解放され独立したのである。

独立後もベトナム人女性は様々な困難を乗り越え、社会に順応するための努力をした。社会活動では、多くの女性が党、政府、労働組合、地域の活動などに参加し重要な役割を担っている。そして多くの女性が政治家、科学者、管理職、教育者、作家、芸術家として活躍している。国会議員の 33%、大卒者の 36%、大学院卒者の 34%、博士の 26%が女性である。またテキスタイル、アパレル、サービスなどの分野では、女性の存在は不可欠である。女性は国家の発展にも重要な役割を演じている。

女性は政府や共産党の活動に貢献をしているので、その存在は常に注目されている。それは女性を支援する政策を通じて見ることができる。2007 年４月政治省は「工業化と近代化に向けた女性への国家の支援策」という法案を可決した。これはベトナム人女性の地位向上のための政策である。この目的を達成するために、2011 年から 2020 年までの男女平等に関する国家行動計画の目標が決められた。例えば教育訓練部門では、教育分野に於ける女性の役割などである。その結果、教育部門における女性教師の質が向上し、数も増大した。現在、女性は全教師数の 74%を占め、また標準的な高校の女性教師は非常に多い。その中で標準以上の女性教師は 20～25%。また大学教育機関には、20,849 人の女性教師がおり、大学院卒の女性教師は全体の 43.8%である。女性教師の多くは、″人民教師″、″優秀な教師″という輝かしい勲章を国から授与されている。女性教師は、ベトナムの子供達の教育レベル向上に大きく貢献しているのである。

---

[4] Hai Ba Trung ：Trung Trac と Trung Nhi　1 世紀頃、後漢の支配にあったベトナムで反乱を指揮した姉妹、「ベトナムのジャンヌダルク」言われている。

[5] Ba Trieu (225-248) : Trieu Thi Chinh 三国時代、Giao Chau が指揮する董鶴の軍と闘った。

＊統一会堂（旧大統領府）

＊女性教師が引率して歴史を教える

日本側共同研究者の視点レポート

＊＊

現在のホーチミンを観る

ベトナム人の平均年齢は約 28 才と、日本の平均年齢 46.1 才（’11 年）と比べると若く、また人口も約 8800 万人と多く、活気に溢れ市場としての魅力も大きい国である。

またベトナムは、豊かさのポテンシャルも高い国である。北部の紅河デルタと南部のメコンデルタと肥沃な穀倉地帯があり、米などの農産物生産高は高く主要輸出品目となっている。さらに天然資源も豊かである。そしてまた産業は、生産基地として、また将来の市場として多くの外資系企業が進出し経済発展に貢献している。そして越僑からのベトナムへの送金金額は 90 億ドルといわれ、GDP 規模約 1200 億ドルの国家にとって貴重な流入資金であり、豊かさの下支えをしている。

現在、中間層は未成熟であるが、実質所得は確実に向上している。以前は、高価で手が出なかった商品、例えば、スマートフォンなどは、月給料の２～３倍に、またバイクなどは年収分に相当するが、若者達は積極的に購入している。彼らは、節約より、それらの商品を購入して生活を楽しむというライフスタイルを求め始めているのである。

ベトナムを観る際に注意しておきたい点が二つある。ひとつは統計データの未整備と信頼性の欠如である。重要データが意図的に公表されないケースや、また統計データと実態の整合性がとれていない事例も多くあるなど正確な統計データを把握することが難しい。従って、公表される統計データに関しては、鵜呑みにするのではなくマクロ的な状況や他国との経済関係の中で実態を読み取る力を養うことが重要である。

もう一つの注意点は、賄賂の問題である。交通事故時の警察官、税関、地方政府、民間企業の仕入れ担当者など、数を上げれば枚挙にいとまがない。例えば、公務員は、月額最低 50 ドル位から最高 500 ドル位であるが、高級官僚クラスになると月額賃料数千ドルのア

パートに住み高級車を乗り回し、海外でブランド品を購入している人も少なからずいる。もちろんこれらの数字は統計データに出てこない。賄賂はマーケティングコストという考え方もあるが、進出する外資系企業にとっては大きな阻害要因になっている。今後大きく発展していくためには、社会的不正を正していくことが政策として求められる。

ベトナムは、1000 年にも及ぶ中国支配、また 100 年に及ぶフランスの植民地として、そして米国の支配や戦火にさらされ、歴史的に塗炭の苦しみに耐えながらも戦争に勝利し、逞しく生き延びてきた民族である。現在、高インフレ、不良債権問題など国内経済が不安定な中で、ASEAN 経済統合化、TPP 参加と貿易自由化に向けて突き進んでいる。また西沙諸島の国境紛争では中国との緊張関係は続いている。しかしベトナムは、培われた歴史の中で、どの様な困難な状況においても、また巨大な国家やグローバル企業とでも、したたかに交渉ができる多方面外交能力を備えている。

ベトナムの近代化は始まったばかりであり、貿易と投資の自由化、裾野産業育成策、社会保障の充実、法制度の整備などの国内・対外政策を一歩一歩進めることにより、国民生活が豊かになる新しいベトナムの発展が期待される。

＊＊

参考文献

・Dang Phong,Thăng Long-Hanoi: The story in a Single Street,Tri Thuc, 2010
・Harvey H. Smith & co., North Vietnam a country study, The American University, 1981
・Hoang Van Chi, The new class in North Vietnam, Saigon, 1958
・Le Chau, Le Viet Nam socialiste -une economie de transition- Francois Maspero, 1966
・Tran Trong Kim, Vietnam history, Bo giao duc, 1919
・William L. Holland, Asian Nationalism and the West, The Macmillan, New York 1953